ようまいってね

2019 9月号

員弁組報　第72号

浄土真宗本願寺派「御同朋の社会をめざす運動（実践運動）」組委員会
〒511-0934　桑名市赤尾959　　発行責任者　石本龍憲
員弁組ホームページ　http://www.inabeso.com/

葬儀・法要
愛灯館
ふれ愛宣言
桑名・多度・阿下喜
大安・東員・朝明
エンディングスペース 桑名・桑名西
http://www.soso.co.jp
株式会社ほくせい
0120-31-4242

恵信尼さま（1182～1268）

お互いを尊敬し合う関係性は素晴らしいものですが、親鸞聖人と恵信尼さまは、まさにそのように理想的な夫婦であったようです。恵信尼文書（おもに末娘・覚信尼への手紙）からは、親鸞聖人のことを菩薩と仰いでいたことがわかります。親鸞聖人より9つ年下ですが、法然聖人の吉水草庵へ通われていたのは一説では恵信尼さまのほうが先だったそうです。ご結婚の時期等についても諸説ありますが、「結婚したほうが念仏しやすいのであれば結婚すればよい」と法然聖人から助言があったとも言われています。

親鸞聖人35歳のとき、念仏弾圧によって流罪となりました。配流先が越後に決まったのは恵信尼さまの父で越後介（いまの新潟県副知事にあたる）の三善為教の配慮があったようです。女性が財産を持つ時代でもありました。ですから、親鸞聖人と恵信尼さまはその後の関東（おもに茨城県の稲田）でもわりと安定した暮らしをしていました。ここまでの結婚生活で5人の子どもに恵まれました。仲睦まじい夫婦の姿は何よりの布教伝道となったであろうと歴史学者の今井雅晴氏は指摘しています。

62歳頃、親鸞聖人は京都へ向かいますが、恵信尼さまは同行されませんでした。現在の常識では理解しづらいのですが、経済的地盤のない場所で大人数では生活できない時代だったのです。夫に付随する義務など当時の女性にはありません。平均年齢（約40歳）を大きく超えていたこともあるのでしょう。互いへの愛情はあれども、自然に離れて暮らすことになったようです。

末娘の覚信尼だけは京都の親鸞聖人について最期を看取りましたが、恵信尼さまは他の子らが近くにいる越後に移り住みました。親鸞聖人を敬い慕って、ときには子らを戒め、ただお念仏を称えつつ、約30年間を過ごした越後が終焉の地となりました。

広報部　松原大　（光明寺）

桑名の老舗
仏壇・仏具・お洗濯
福井屋
白い象が目印
寺町本店　新西方店　明竜工場
☎代表 0594－22－3121

団体参拝から個人旅行まで　旅のご用命は
観光庁長官登録旅行業第55号　（一社）日本旅行業協会正会員
名鉄観光サービス株式会社
四日市支店
四日市市諏訪町4番5号　住友生命四日市ビル1階
電話 059-353-8558　本願寺担当者：佐藤　篤

墓石・石材工事一式
石慶
大安町石榑南
デンワモヤッバリイシヤ
☎78－0148
（工場）☎78－2039